

機能範疇 CAUS による他動詞の形態統語論的分析

新山聖也（筑波大学非常勤研究員）・竹本理美（筑波大学非常勤研究員）

1. はじめに

日本語の他動詞には、「剥がす」のように顕在的な他動化辞-s-を持つもの（以下、-s-他動詞）と「剥ぐ」のように顕在的な他動化辞を持たないもの（以下、-∅-他動詞）が存在する（cf. 須賀 1980, Oseki 2017, 大関 2021）。また、他動詞文の主語位置には、動作主である Agent が生起するパターンのほかに原因である Causer が生起するパターンが存在する（cf. Hasegawa 2004, 長谷川 2016）。そして、-∅-他動詞と-s-他動詞では、その主語に生起可能な意味役割に違いが見られる。

- (1) a. 太郎がポスターを剥いだ。
b. 太郎がポスターを剥がした。
- (2) a. *連日の雨がポスターを剥いだ。
b. 連日の雨がポスターを剥がした。

本発表では、(1) (2) のような他動詞が持つ他動化辞と他動詞の主語の関係について、Hasegawa (2004) の統語論的分析と Oseki (2017) の形態論的分析を検討し、両者の分析に対立が存在することを指摘する。

この対立に対して、本発表では、他動詞が持つ機能範疇として Voice と CAUS を仮定する Alexiadou et al (2006, 2015) の枠組みを採用することで、両者の分析を統合した形態統語論的分析が可能になることを主張する。

2. 問題の所在

- ・ Hasegawa (2004) ほか：他動詞主語の階層的な位置が Agent と Causer で異なる。
 - ・ Oseki (2017) ほか：-s-他動詞の主語は Causer であり -∅-他動詞の主語は Agent である。
- いずれも重要な観察に基づいて分析を行っているが、双方の分析が矛盾する。
→本発表では他動詞主語の階層的な位置と他動化辞を同時に扱う分析を提案する。

2.1 Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) 他動詞主語と階層的な位置の関係

- ・ 非対格自動詞の文において、Agent は生起不可能だが Causer は生起可能である。
- Causer は VP に出現可能な要素である。

- (3) a. 電車が {事故で/*車掌で/*車掌によって} 遅れた。

- b. 枝が {風で/*花子で/*花子によって} 揺れた。

(Hasegawa 2004 : 305 ニヨッテの例を追加)

- ・主語が Agent であるか Causer であるかによって、主語の数量表現の作用域が異なる。主語が Causer の場合は、主語にある or と目的語にある all の作用域に関してどちらが広い解釈も可能である。一方、主語が Agent の場合は、主語にある or が常に広い解釈しか許容されない。

→Agent と Causer は統語的な生起位置が異なる。

- (4) a. [風か雪]が全ての電車を遅らせた。Ambiguous [OR > ALL or ALL > OR]
 b. [車掌か運転手]が全ての電車を遅らせた。Not ambiguous [OR > ALL]

(Hasegawa2004 : 307)

- ・以上の対立に基づいて Hasegawa (2004) は、Agent がより高い位置である vP、Causer がより低い位置である VP に基底生成するものと主張する。

- (5) a. [vP [VP 電車 雪 okur]ase]
 b. [vP 運転手 [VP 電車 okur]ase]

2.2 Oseki (2017)・大関 (2021) 他動詞主語と他動化辞の関係

- ・-s-他動詞と- \emptyset -他動詞で、Causer の可否に対立が見られる。

- (6) a. 風が壁紙を {*剥いだ/剥がした}。
 b. 雨が粉末を {*溶いた/溶かした}。

(大関 2021 : 7)

- ・大関 (2021) は、自動化辞・他動化辞を v ではなく Voice と見なす立場に立ち、日本語に Voice_[+D]・Voice_[+D]・Voice₀ の 3 種類の Voice が存在すると主張する。

→他動化辞-s-は Voice_[+D]、自動化・他動化辞- \emptyset -は Voice₀ とされる。

- (7) a. Voice_[+D] : 他動化接辞-S-
 b. Voice_[-D] : 自動化接辞-R-
 c. Voice₀ : ゼロ接辞- \emptyset -・両価接辞-E-

(大関 2021 : 16)

- ・Voice_[+D]は義務的に外項を導入する Voice であるのに対し、Voice₀ は随意的に外項を

導入する Voice である。

- ・そして、大関 (2021) は外項が VoiceP に生起する (8) のような統語構造を仮定し、Voice_[+D]は外項に Causer の意味役割を付与し、Voice₀は外項に Agent の意味役割を付与するものと分析している。

- (8) a. [VoiceP 風が_[VP] 壁紙を hag]-s- (Voice_[+D])
b. [VoiceP 子供が_[VP] 壁紙 hag]-∅- (Voice₀)

→Oseki (2017)・大関 (2021) の分析においては、Agent であっても Causer であっても主語の階層的位置は VoiceP という同一の階層であり、Voice が付与する意味役割が異なるという分析になっている。これは、Agent が階層的に高い位置に基底生成し、Causer が階層的に低い位置に基底生成するという Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) の分析と対立する。

→また、Oseki (2017)・大関 (2021) の分析においては-s-他動詞が常に Causer と見なされることになる。しかしながら、Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) の観察の通り、同じ-s-他動詞の「遅らせる」であっても、主語の意味役割によって意味解釈に対立が生じることから、-s-他動詞の主語を常に Causer と見なす分析には問題がある。

→一方、Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) の分析では、他動化辞-s-と-∅-の性質の違いを取り扱うことはできず、統語論的な階層に関する分析と形態論的な他動化辞の分析を両立するには、異なった形のアプローチが必要である。

3. 本発表のアプローチ

- ・前節で確認したように、他動詞主語の意味役割に関する分析を展開している Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) と Oseki (2017)・大関 (2021) には、矛盾した点が見られる。
- ・両者の分析を統合的に捉えるうえでは、Alexiadou, Anagnostopoulou and Schäfer (2006, 2015) の枠組みが有要だと考えられる。さらに本発表では Alexiadou et al. (2006, 2015) を基盤とした竹本 (2022) の枠組みを提示し、分析を展開する。

Alexiadou, Anagnostopoulou and Schäfer (2006, 2015)

- ・非対格自動詞の文にも事象の引き起こし手である Causer が現れるという事実観察から、外項の導入と使役性を表す機能範疇をそれぞれ独立して捉えたうえで¹、使役

¹ 理論の流れとしては、Pylkkänen (2002, 2008) によって使役性を表す機能範疇が外項の導入を担う機能範疇とは独立して捉えるべきだと論じられていることが理論的基盤となっている。

接辞が現れない場合にも使役性を示す機能範疇が含まれると分析している。

- (9) a. The window cracked / broke from the pressure.
 b. The window cracked / broke from the explosion.
 (Alexiadou et al. 2006: 194 下線筆者)

・ここから Alexiadou et al. (2006, 2015) では、分散形態論を下地にして、非対格自動詞は Root² と内項に加えて使役概念を含意する機能範疇 CAUS が含まれる構造を持ち、他動詞は CAUS までの構造は共通しつつも、外項を導入する機能範疇 Voice (Kratzer 1994, 1996) が追加された構造を提案している。

- (10) a. 非対格自動詞 (anticausative) : [CAUS [$\sqrt{\text{Root}} + \text{DP theme}$]]
 b. 他動詞 (causative) : [DP ext.arg Voice [CAUS [$\sqrt{\text{Root}} + \text{DP theme}$]]]
 (Alexiadou et al. 2015: 36 一部改変)

竹本 (2022)

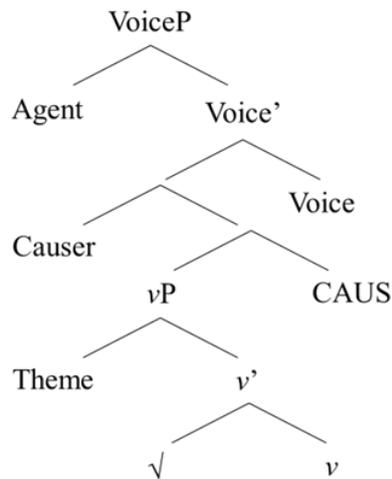
・竹本 (2022) では、Alexiadou et al. (2006, 2015) の議論を踏まえ、日本語においても (11) のように非対格自動詞の文において Causer が現れること、また (12) のように他動詞文や使役文においても Causer が現れることから、外項の導入と使役性が切り離されるという議論が適用されることを指摘した。

- (11) 城の石垣が地震で崩れた。(cf. *城の石垣が作業員で崩れた。)
 (12) a. 突然の大雪が駅員である太郎を夜遅くまで働かせた。
 b. 地震が城の石垣を崩れさせた。

・このとき、使役概念の導入を担う機能範疇 CAUS, 外項の導入を担う機能範疇 Voice から構成される構造を基本としたうえで、Agent は機能範疇 Voice, Causer は機能範疇 CAUS によって導入される構造を提案している。

² Alexiadou et al. (2006, 2015) では分散形態論 (Distributed Morphology: Halle and Marantz 1993) の中核的な仮説の一つであるルート仮説 (Root Hypothesis) に基づいている。ルート仮説とは、範疇未指定の要素である Root は、派生の段階でその範疇が決定すると考えられるものである (Marantz 1997)。なお、Oseki (2017)・大関 (2021) も分散形態論に基づいて分析を展開している。

(13)



Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) との整合性

- ・竹本 (2022) の構造に基づくことで、Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) による分析と Oseki (2017)・大関 (2021) による分析を統合した分析が可能となる。竹本 (2022) で提案された構造では、Oseki (2017)・大関 (2021) と異なり、Agent と Causer が異なる位置に生起するので、意味解釈の対立を捉えることができる。
- ・ただし、Hasegawa (2004)・長谷川 (2016) で取り上げられた Agent と Causer の作用域の違いに関して、(13) の構造では Causer が Theme より上位に位置するため、一見長谷川の観察とは矛盾するようにも思われる³。

- (14) a. [風か雪]が全ての電車を遅らせた。Ambiguous [OR > ALL or ALL < OR]
 b. [車掌か運転手]が全ての電車を遅らせた。Not ambiguous [OR > ALL]

(再掲)

しかし、Causer と Theme が共起する非対格自動詞の文において同様に作用域を観察すると、次のように、主語にある all が広い解釈も、付加詞にある or が広い解釈も両方可能である。

- (15) a. 全ての電車が[風か雪]で遅れた。Ambiguous [ALL > OR or OR > ALL]
 b. [風か雪]で全ての電車が遅れた。Ambiguous [OR > ALL or ALL > OR]

³ なお、Theme が主語となる非対格自動詞の文や Causer が主語となる他動詞文においても、これらの要素が VoiceP の指定部に立ち寄ると考えられる。そのときの Voice を Voice[-External Argument]とし、一方で Agent が主語となる場合には Voice[+External Argument]と素性によって区別を行っている。

すなわち、Causer と Theme は作用域に関して統語的に等位置にあると言える。したがって、(13) の構造によって長谷川の観察を説明することができる。さらに、(13) の構造から長谷川の観察を捉えることで、Causer 主語他動詞文における作用域の曖昧性は移動によって引き起こされるわけではないことが示される。

4. 他動化の形態に関する分析

4 節では、他動化辞の形態についての分析を提示することで、機能範疇 CAUS を仮定する枠組みで、本発表のアプローチが Oseki (2017)・大関 (2021) の観察を適切に捉えることができることを説明する。

提案：分散形態論における後期挿入 (late insertion : cf. Halle and Marantz 1993) の前提に従って、CAUS[+Causer]の有無によって Voice[+ACC]が-s-となるか-∅-となるか決定するものと捉える。

・後期挿入 (late insertion : cf. Halle and Marantz 1993)

分散形態論においては、Syntax における計算が終わった後に音韻部門で形態が決定する。例えば、英語においては過去の形態として“-ed”だけではなく“-t”や“-∅”が存在する。

- (16) T[+past] allomorphy in English
- a. -ed: play-ed, watch-ed, kiss-ed
 - b. -t: ben-t, sen-t, lef-t
 - c. -∅: hit-∅, quit-∅, sang-∅

(Embick2015 : 92)

分散形態論では Syntax に存在する T[+past]という素性に対して、統語論的条件によって異なる形態が挿入されるという分析を取る。このとき、-ed は他の条件に当てはまらない場合を選択される非該当形 (elsewhere form) となる。

- (17) Modified Vocabulary Items
- T[+past] ↔ -t / {√BEND, √LEAVE...}__
- T[+past] ↔ -∅ / {√HIT, √QUIT...}__
- T[+past] ↔ -ed / elsewhere

(Embick2015 : 93)

本発表でも、後期挿入のメカニズムを用いて、-s-と-∅-という形態の分布について捉えることを試みる。

・Voice[+ACC]

大関は Voice[±D]と Voice[0]を仮定し、Voice[+D]が-s-、Voice[0]が-∅-であると分析して

いる。しかしながら、Voice[+D]が VoiceP に Causer を導入するという分析においては、Agent と Causer の階層的位置の違いを捉えることはできない。

本発表では他動詞が持つ Voice として Voice[+ACC]を仮定し、Agent を導入するか否かではなく、隣接する CAUS が Causer を導入できる CAUS[+Causer]か Causer を導入できない CAUS[-Causer]かの違いによって他動化辞の形態を取り扱うことを試みる⁴。

以上を踏まえ、(18) の形態規則を提案する。

- ・ -s-他動詞と-∅-他動詞はいずれも Agent を導入できる Voice[+ACC]を持っている。
- ・ しかしながら、他動詞が Causer を導入できる CAUS[+Causer]を持つ場合に限り Voice[+ACC]は-s-という形態で具現する。-∅-は非該当形 (elsewhere form) であるため、他動詞が CAUS[+Causer]を持たない場合には-∅-が選択される⁵。

(18) Voice[+ACC]と CAUS に関する形態規則⁶

Voice[+ACC] ↔ -s- / CAUS[+Causer]__

Voice[+ACC] ↔ -∅- / <elsewhere>

→Oseki (2017) および大関 (2021) の分析においては Voice そのものが Causer を導入する性質を持つため、同じ他動詞の主語であっても Agent と Causer が異なる階層に出現するという Hasegawa (2004) ・長谷川 (2016) の分析と両立できない。

→一方、本発表の分析は、-s-他動詞が Causer を導入し、-∅-他動詞が Causer を導入しないという対応関係を踏まえた上で、Agent を導入する Voice と Causer を導入する CAUS を異なる階層に存在する機能範疇として取り扱うことに成功している。

→また、この提案は CAUS の存在が Voice の形態を決定するという主張であり、日本語に機能範疇 CAUS が存在するという竹本 (2022) の主張を支持する形態論的な証拠と考えられる。

⁴ なお、長谷川 (2016) は他動化辞を Voice ではなく v として分析しているが、v は [±外項][±対格]の2種類の素性の対立を持つと仮定している (cf.長谷川 1999)。本発表の分析は、あくまで形態と対応する素性が[±ACC]であると仮定しているため、形態とは無関係な素性として[±External Argument]を仮定することも可能である。

⁵ なお、竹本 (2022) の枠組みでは非対格自動詞も CAUS[+Causer]を持つことになるため、CAUS[+Causer]そのものを-s-と仮定すると問題がある。よって、あくまで Voice が CAUS の有無によって形態を決定されると考える必要がある。

⁶ Oseki (2017) ・大関 (2021) の分析は、自動化辞・他動化辞ともにあらわれる-∅-という形態を Voice₀ という機能範疇によって捉えている。本発表の枠組みでは自動詞を取り扱っていないが、自動化辞についても-ar-が統語論的条件を指定された形態と仮定すれば、Voice に関しては非該当形 (elsewhere form) として常に-∅-が選ばれるという一般化が可能になる。

5. 意味論的サポート

- ・ -s-他動詞が持つ CAUS[+Causer]と-∅-他動詞が持つ CAUS[-Causer]の違いは、意味論的な現象によっても支持される。

5.1 手段との共起制限

- ・ 臼杵 (2015) は「殴る」のような様態動詞と「壊す」のような結果動詞において、様態が指定されている様態動詞に対して、結果動詞は「様々な（身体を含めた）道具で修飾することが可能（臼杵 2015 : 287）」と述べている。

- (19) a. 太郎は、{素手で/木刀で/*ナイフで/*足で/*水で} 次郎を殴った。
 b. 太郎は、{素手で/木刀で/ナイフで/足で/水で} テレビを壊した。
 (臼杵 2015 : 287)

- ・ 本発表で取り扱う -s-他動詞と -∅-他動詞はいずれも自他対応を持つ点で結果動詞であるが、手段の共起に関して異なったふるまいを見せる。

→ -∅-他動詞においては手段が制限される一方、 -s-他動詞においては手段が制限されない。

- (20) a. 太郎は {手で/*水をかけて} 壁紙を剥いだ。
 b. 太郎は {手で/水をかけて} 壁紙を剥がした。
 (21) a. 太郎は {かき混ぜて/*液体の温度を上げて} 粉末をといた。
 b. 太郎は {かき混ぜて/液体の温度を上げて} 粉末をとかした。
 (22) a. 太郎は {鍵をかけて/*廊下に罌を設置して} 部屋を閉じた。
 b. 太郎は {鍵をかけて/廊下に罌を設置して} 部屋を閉ざした。

さらに、上記に挙げた例は Oseki (2017)・大関 (2021) が扱ったような二つの他動詞が存在する動詞の例であったが、自他が一对一で対応する動詞においても同様の観察が得られる。破壊系の他動詞でも、「切る」と「破る」のような -∅-他動詞と「壊す」と「崩す」のような -s-他動詞で手段に関する対立が見られる。

- (23) a. 太郎は {*手で/ハサミで} 紙を切った。
 b. 太郎は {手で/*ハサミで} 紙をやぶった。
 (24) a. 太郎は {手で/水を流して} 砂のお城を壊した。
 b. 太郎は {手で/水を流して} 砂のお城を崩した。

また、別の人物に指示を出すような文脈においても対立が見られ、 -s-他動詞の「外

す」は指示を出した人物が主語となっても自然だが、- \emptyset -他動詞の「取る」は指示を出した人物が主語になると不自然であり「取らせる」の方が自然である⁷。このような人物の介在も、一種の手段と見なすことができ、-s-他動詞は手段に関する制限が薄い。

- (25) a. 太郎は執事に言って玄関の絵画を {外した/外させた}。
b. 太郎は執事に言って玄関の絵画を {??取った/取らせた}。

以上の対立は、CAUS[+Causer]と CAUS[-Causer]の対立が Causer の導入という項構造の問題だけではなく、手段の制限という他動詞の意味と関係していることを意味している。

- (26) a. CAUS[+Causer] : 事態を達成するための手段に制限がない。
b. CAUS[-Causer] : 事態を達成するための手段に制限がある。

より踏み込んだ議論としては、CAUS[-Causer]を持つ他動詞においては「Agent がどのような動作によって使役的事態を達成するか」が他動詞の持つ意味として指定される (cf. 須賀 1980) ため、Causer が生起できないものと考えられる。

5.2 手段関係の複合動詞における生起位置

- ・前項動詞が手段をあらわす複合動詞 (松本 1998) においても- \emptyset -他動詞と-s-他動詞の違いを観察することができる。
- ・まず、前項動詞が手段をあらわす複合動詞において、「剥ぐ」「とく」「閉じる」のような- \emptyset -他動詞は前項動詞として生起できる一方で、「剥がす」「とかす」「閉ざす」のような-s-他動詞は生起できない⁸。

- (27) a. 太郎はポスターを {剥ぎ/*剥がし} 取った。
b. 太郎は髪を {とき/*とかし} ほぐした。
c. 太郎は次郎を物置に {閉じ/*閉ざし} 込めた。

- ・松本 (1998) では、手段の意味的特性として「使役者が、その使役を達成させるための一段階として行う具体的行為」(松本 1998 : 53) と述べており、上記で示した

⁷ なお、「髪を切った」は髪を切ったのが床屋であっても主語に髪を切られた人物が出現できる。このような介在的な使役の許容度に関しては、社会的文脈も関わるため、どこまで一般的な議論として拡張できるか注意を要する。

⁸ なお、後項動詞であれば- \emptyset -他動詞と-s-他動詞の両方が生起可能である。

(i) 太郎はテープを丁寧に引き {剥いだ/剥がした}。

ような- \emptyset -他動詞と-s-他動詞の生起の違いは、「手段をあらわす」ことが手段となる動作を行う動作主すなわち Agent の存在を示唆することから説明される⁹。

- 5.1 節と同じく、複合動詞に関しても、自他が一对一で対応する動詞においても同様の観察が得られる。具体的には、次のように-s-他動詞と- \emptyset -他動詞を組み合わせた複合動詞において、- \emptyset -他動詞が前項動詞として生起可能であるのに対し、-s-他動詞が前項動詞として生起不可能であるという現象が体系的に観察できる¹⁰。

- \emptyset -他動詞+-s-他動詞

- (28) a. 太郎は木を切り倒した。
 b. 太郎は汚れを削り落とした。
 c. 太郎は絵画を取り外した。

-s-他動詞+- \emptyset -他動詞

- (29) a. *太郎は汚れを落とし取った。
 b. *太郎はネジを回し抜いた。
 c. *太郎は小皿を飛ばし割った。

- \emptyset -他動詞+- \emptyset -他動詞

- (30) a. 太郎は汚れを削り取った。
 b. 太郎は布を切り裂いた。
 c. 太郎はリンゴをもぎ取った。

-s-他動詞+-s-他動詞

- (31) a. *太郎は氷を溶かし消した。
 b. *太郎はプラモデルを潰し壊した。
 c. *太郎はジェンガを倒し崩した。

- 以上のような前項動詞が手段をあらわす複合動詞における観察は、- \emptyset -他動詞が CAUS[-Causer]を持ち、-s-他動詞が CAUS[+Causer]を持つことを反映しているといえる。

⁹ 松本 (1998) では、前項動詞が手段をあらわす複合動詞として以下のような動詞を挙げ、前項動詞を「動作主的動詞」と捉えている。

押し倒す、たたき落とす、切り抜く、焼き付ける、折り曲げる など

(松本 1998 : 52 一部抜粋)

¹⁰ ただし、以下のように-s-他動詞が前項動詞となるような例外も見られる。

(i) 包丁で切ったゆで卵より、糸でまわし切ったゆで卵のほうが表面がよりなめらかになり、ツヤも出ています。

(参考 : <https://www.lettuceclub.net/news/article/1022116/p3/>)

しかし、上記の例はレシピのような一定の環境に現れるために許容される可能性がある (cf. 具森 2016)。

6. おわりに

本発表では、先行研究において対立が認められる (32) と (33) の分析を前提として、両者の分析を両立する (34) の主張を行った。

- (32) Agent と Causer は生起位置が異なる。(Hasegawa2004, 長谷川 2016)
- (33) 他動化辞の形態と Causer の可否は連動している。(Oseki2017, 大関 2021)
- (34) 他動詞文において Agent は VoiceP に生起し、Causer は CAUS に生起する。そして、Causer を導入できる CAUS[+Causer]を持つ場合に他動化辞の形態として -s- が選択される。

また、本発表の前提として Alexiadou et al (2006, 2015) と竹本 (2022) の枠組みを採用しているが、これらの分析において仮定される機能範疇 CAUS の実在に関して、他動化辞-s- と -∅- の対立という形態論的な証拠を提示した点も、本発表の意義と言える。

本発表の課題としては他動化辞-e- の取り扱いが挙げられる。Oseki (2017)・大関 (2021) では他動化辞-∅- と他動化辞-e- について同一の性質を持つ Voice₀ として扱っている。

- (35) 台風が岩を {*退けた/退かした}

大関 (2021 : 15)

しかしながら須賀 (1980) で指摘されている通り、-∅- 他動詞と -e- 他動詞が対立を示す事例が存在し、「手をつなぐ」や「口に水を含む」のように状態変化を含意しない動作をあらわす場合に -e- 他動詞が生起できないことがある。

- (36) a. 私は子供と手を {つないで/*つなげて} 散歩した。
b. 私は口の中に水を {含んだ/*含めた}。

(須賀 1980 : 36)

形態素-e- は自動詞・他動詞のいずれも出現し得るという点で、-∅- と似た性質を持っているのは確かだが、他動化辞-∅- と他動化辞-e- を同様に扱うべきかに関しては今後検討していく必要がある

参考文献

白杵岳 (2015) 「様態・結果の相補性仮説に関する一考察」由本陽子、小野尚之(編)『語彙意味論の新たな可能性を探って』 p.274-299

- 大関洋平 (2021) 「分散形態論と日本語の他動性交替」岸本秀樹 (編) 『レキシコン研究の現代的課題』 pp.1-23, くろしお出版.
- 貝森有祐 (2016) 「レジスターから見る語彙・構文の選択と英語教育への含意: レシピに注目して」 『Encounters: 獨協大学外国語学部交流文化学科紀要』 (4) pp. 65-82.
- 須賀一好 (1980) 「併存する自動詞・他動詞の意味」 『国語学』 120, pp.31-41, 国語学会.
- 竹本理美 (2022) 『現代日本語における使役表現の統語的分析』 筑波大学博士論文
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』 大修館書店.
- 長谷川信子 (2016) 「日英語に見る主語の意味役割と統語構造」 藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ —生成文法・認知言語学と日本語学—』 pp.2-26, 開拓社.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114, pp.37-83
- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Florian Schäfer (2006) The Properties of Anticausatives Crosslinguistically. In Mara Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation*. pp.187-213. Berlin: Mouton.
- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Florian Schäfer (2015) *External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Bobaljik, Jonathan David (2000) “The Ins and Outs of Contextual Allomorphy,” University of Maryland Working Paper in Linguistics 10, 35–71.
- Embick, David (2015) *The Morpheme: A Theoretical Introduction*. De Gruyter Mouton
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the pieces of inflection,” Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, 111-176, The MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko (2004) “‘Unaccusative’ transitives and Burzio’s Generalization: Reflexive constructions in Japanese.” *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics*, Vol1. MIT Working Papers in Linguistics (46) pp.300-314. MITWPL.
- Marantz, Alec (1997) No Escape from Syntax: Don’t Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon. In Alexis Dimitriadis, Laura Siegel, Clarissa Surek-Clark, and Alexander Williams (eds.) *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 4-2. pp.201-225. Philadelphia: University of Pennsylvania.
- Oseki, Yohei (2017) Voice Morphology in Japanese Argument Structures.
(<https://ling.auf.net/lingbuzz/003374>)
- Pylkkänen, Liina (2002) *Introducing Arguments*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Pylkkänen, Liina (2008) *Introducing Arguments*. Cambridge, MA: MIT Press.